

女性語研究のスタンス

井出祥子

1. はじめに

女性語の研究が日本において盛んになってから十数年が過ぎた。女性語の研究にはさまざまな目的意識があり、それに応じたアプローチがある。本稿では、女性語とかかわってきた一人の言語の研究者の目を通して見た日本における女性語研究のこれまでの道のりを振り返り、日本における女性語研究のスタンスについて考察することを試みる。

2. 1970年以前

日本においては、女ことばの研究は、国語学の伝統の中で女房詞、遊里語などを対象として、文献を資料として行われてきた。一方、西欧では、西欧語の女性語研究としてみるべきものは無かった。

アメリカの言語学者 Mary Haasはアメリカ・インディアン言語、コアサティ語の文法記述のためのフィールドワークを行っているとき、女性と男性とでは規則的に異なる形態素をもつことを知った。そこで、コアサティ語に限らず男女で絶対的に異なる言語をもつタイ語や他のアメリカ・インディアンの諸言語にも目を向けて、それまで、男性語のみを言語としてきた言語の偏った見方の反省に一石を投じる論文を書いた (Haas 1944)。その中で、彼女は、言語の男女差に三つのタイプがあるとした。一つは、話し手の性によるもの。二つ目は、聞き手の性によるもの。三つ目は話し手と聞き手の性によるものである。コアサティ語は第一の例、聞き手の性で二人称代名詞の異なるアラビア語は第二の例である。日本語では、一人称代名詞、終助詞等は第一の例、二人称代名詞は第二の例。ということは、日本語は第三の例ということになる。

このような絶対的な女性語は、話し手や聞き手の性によって必ずどちらかの言語形式や表現を選択しなければならないというもので、その研究は当然のこととしてそのような男女語を持つ言語のみを対象としておこなわれてい

た。そのような男女差が顕著でない西欧語においては、女性語の研究が大きな問題にならなかったのは当然のことである。

女性語研究が盛んになったのは、男性、女性のどちらがより多く特定の言語形式や表現を使うかという相対的な差を問題にしはじめてからであり、それは1970年代になり、男女の問題が社会問題として大きく浮かび上がってきたからのことである。

3. 1970年以降

1970年代は、アメリカで起こったフェミニズム主義のインパクトが学問および社会を変化させ始めたときである。

言語学の分野においては、カリフォルニア大学教授 Robin Lakoff が1971-2年にスタンフォード大学の行動科学高等研究所において一年間研究した成果として 'Language and Woman's Place' という論文を書き、それが1973年に出版され、女性語研究の金字塔をたてることになった。この論文で Lakoff は女性を言語をとおして見ることにより、女性が自分達のことをどのように見ているか、また世の中が女性の特質や女性の役割をどういうものであるとしているかを明らかにした。

フェミニズム以前の学問は男性の視点ですべての現象を見てきたとして、諸学問を女性の視点で洗い直すことを課題としたのがフェミニズム主義台頭後の学界の風潮であった。その中で、この課題に勇敢にも、もっとも全うに言語の問題に立ち向かったのが Lakoff であった。当時言語学の主流であった生成文法のトレーニングを受けた彼女が、この問題に向かう道具として使ったのは、例文を研究者の頭の中で作り、それが非文か否かを問いながら人々の言語能力を明らかにしていく方法であった。彼女は、言語能力を明らかにする方法を使い、数々の例文が容認可能か否かを問題にしなが、言語能力の代わりに、人々が社会で分け持っている女性に関する通念を明らかにした。そのために使われた材料は女性の使う言語と女性に関する言語表現であった。

このようにして、明らかにされた Lakoff の言語にみる女性観の深い洞察

は、多くの女性語研究を啓発することになった。それまで、人々が当たり前と
思ってきた女性観は、実は、社会の慣習的な女性観の産物であり、それを植
え付け維持するために使われているものが、そのような考えを内在した言語
をそのような社会で受け入れられるような使い方で使っているためである。
Lakoffはそのことを現実をえぐるような形で読者に示し、納得させたのであ
った。我々が日常使う言語は、人々が潜在的に持っている考え方を支配して
いることを、目から鱗が落ちる思いで認識させられた読者、特に女性研究者
達は、Lakoffの提示した女性語に関する仮説の検証のためのさまざまな研究
をおこなった。70年代以降、アメリカおよびヨーロッパで爆発的に生み出さ
れたおびただしい数の女性語研究の背景的にはこのような事情があったので
ある。

Lakoffの提示した仮説とは、女性は社会において周辺の場所に置かれてお
り、権力を持つことのできる場所には居られないようになっており、また潜
在的に能力がないように見られているが、それはそのような現実を内在して
いる言語をそのような使い方で使用しているからである、というものであ
った。つまり、女性は女性であるだけで男性より劣り、社会的に低い地位に
いるのが当然とする社会通念は、言語を手がかりに見ることができる、とい
うものである。

さらに彼女は、女性語をこのようなスタンスで研究することで、言語の中
の不平等を社会における男女の不平等の元凶のひとつとして指摘すること
ができると考えた。言語の不平等を変えることができれば、不平等の社会を正
義に向けて変えていくことができると主張したことが、欧米の女性による女
性語研究のうねりを生む原動力となったとみることができる。

4. 日本における女性語研究の受容

女性語イコール劣性の言語という構図で行われてきた欧米の女性語研究は、
どのように日本語の女性語研究にインパクトを与えたであろうか。

1979年に女性語に関する本二冊(寿岳 1979、井出 1979)が出版され、1980
年に女性による研究誌『ことば』が創刊されたことは、それまでにほとんど

見られなかった女性語に対する関心が日本に於ても持たれ始めたことを示すものである。

1980年代には、ひとつの女性語研究班が女性語研究のためのプロジェクト研究をおこなった。その成果として、言語表現の使用に関するアンケートによるデータを分析したもの、および社会言語学的情報付きの談話資料とそのK W I C資料という二つの報告書を出版した(井出他 1984、井出他1985)。これは、1982年から3年間にわたって行われた文部省科学研究費、特定研究「情報化社会における言語の標準化」のテーマのもとに行われた科学研究の国家的事業の一端を担うものであった。

このプロジェクトは、報告書の序文で本特定研究総括班主査の柴田武氏が「(本書の第四の特質として)井出さんの研究は、単に社会言語学の学的な興味から女性の敬語をテーマにとりあげているのではないということ。女性の敬語をとりあげ、それを社会言語学的に研究しようとする。その背景には、なぜ日本の女性は男性より敬語をよけいに使わなければならないのかといった女性問題的な発想とそれにたちむかう情熱がひそんでいるように思う。その情熱が井出班の研究を突いて進めた原動力にちがいない。」と述べておられるように、国家的研究プロジェクトの一環として行われたが、たしかに、アメリカのフェミニズムの影響下の女性語研究のスタンスをもっていた。しかし、多量のデータにより、現実の言語使用の実態調査を行い、その分析をとおして、女性はどのように、そして何故男性より丁寧な言語表現を使うのかの問いに答えるべくデータの分析と考察を重ねた。つまり、フェミニズムの視点で言語使用現象を観察、分析、考察するというより、言語事象を事実にてできるだけ忠実に見ることを第一にこころがけたものであった。その結果、わかったことのひとつは、女性が男性より丁寧な言語表現を使用するのは、地位の差としての性差によるものではなく、役割の差によるということであった。つまり、主婦という役割を担う多くの女性は仕事のための効率より、付き合いをうまく行うためのやりとりを重んじることが多いので、より丁寧な言語表現を使用している。一方男性は、仕事場の人間関係のやりとりが多いので、効率よい話し方が優先させられる。そこには、丁寧さはあっても、

社交の場におけるような高度の丁寧さは使われない。さらに、丁寧に話すのは、相手のためだけでなく、自分の品位を示すためのものでもあるということも明らかになった。

このようなデータの分析の結果明らかにされた知見は、それまで女性が丁寧なことばを使うのは、女性の地位が低いからというネガティブに捉えるものから、ポジティブにも捉えることのできるものとしての解釈を可能にした。

フェミニズム主義のスタンスをもって女性語のプロジェクトがおこなわれたが、この研究班に加わった若手の女性研究者達は、欧米の人々とは異なり、フェミニズム理論の影響を受け難い独自のスタンスを堅持していた。その理由には、二つ考えられる。一つは、彼女達は、欧米の女性達のように女性を劣性の性と捉えていないこと。男女の差異をトータルに見たとき、女性の地位や役割は男性のそれとは異なることは認めても、そのことをポジティブに見ていたこと。つまり、女性は男性を立てているので、男性は地位が上であっても多面的にみれば女性はそれなりに悪くない立場にいると考える、というものである。もう一つは、女性語について、彼女たちは劣った地位を維持するために使われる良くないものと捉えていないばかりか、女性語の良い点を積極的に認めていることであった。

このようにして、欧米での女性語イコール劣性の言語という構図は、日本語にはそのままあてはまるものではなかった。欧米のような爆発的な女性語研究が日本では見られなかった原因はここにあると見ることができよう。

5. 国際社会の中での女性語研究

欧米主導型の女性語研究は、その暗黙の前提として、欧米社会の基本的な個人のあり方、社会のあり方にもとづいている。つまり、アングロ・サクソン社会、とくに白人中流階級における強い個人主義文化の男女のあり方を基礎にしている。それは、個人が社会で存在するためには誰でもが平等で、当然のこととして同じ権利をもっている、と言う強い信念に支えられている。社会において女性が男性と同じ地位の扱いや、同じ権利を持っているのが正義である、とするものである。異なることは、差別であり、それは改善され

るべきものというものである。

一方、日本社会においては、たてまえとしては、平等や権利などが個人の基本的人権としてうたわれているが、実際は、個人は場における人間関係の役割として捉えられ、平等や権利などは、それぞれの場において規定されていて、必ずしも誰もが同じであるべきとは考えない。個人の捉え方が、西欧の個人主義の社会におけるそれと異なり、相手との関係で規定される。女性であることは、そういう役割の人間として、場において自己規定するためのひとつの性のカテゴリーを認識することである。このように女性を捉える社会では、欧米のように男女平等の名のもとに、同じ権利が得られなければ、それはいけないこととして改善の対象として考える、というような短絡的な考えは存在しない。このような社会では、女性語の問題も男性語と比較する際、一対一の対照のものとしてみることができるだけ単純なものとは考えない。

世界各地を見渡すと、文化人類学者達がこれまで記述してきたものの中に、如何に文化が異なれば、男女の関係や規定の仕方が異なるかを知ることができる。その中には、阿部（1992：316-319）が指摘するように、欧米の男女のステレオ・タイプと正反対の男女の関係をもつ文化もいくつも見られる。女性の方が家庭での経済的実権を握っている文化も珍しくない。事実、現代の日本の多くの家庭はその一例である。

フェミニズム主義で男女語を研究するとき、これまで女性を劣性として見てきたという反省から現象を見直すが、これは、女性を劣性としてきた社会においてのみ適用されるものである。こうしてみると、1970年代以来欧米で興隆した女性語研究の仮説はあたかも普遍的なもののように欧米の人々は考えてきたようであるが、それは、民族中心主義の考え方にすぎないことがわかる。

今後の女性語研究は、まず、世界には、欧米、日本だけでなく数多くの国や文化があることを認識し、多元的国際社会の視点で問題を捉え、それぞれの文化で男女の地位、役割がどう異なるのかを踏まえた上で行われなければならないであろう。

6. 学際的統合的女性語研究

これまでの女性語研究は、言語のある限られた機能を対象としての研究に限られていた。Lakoffがみた言語表現に内在する性差別の研究は、言語のさまざまな機能のうち、指示的機能を主に問題にしてきた。女性に関する言語表現が指し示すものが社会での通念であるという前提にたち、言語に反映している性差別を指摘したものである。これは、これまでの言語学が大方、言語の指示的機能を主として問題にしてきたことから当然のことといえよう。しかし、女性語の意義は指示的機能以外の機能にもかかわっている。女性らしい話し方の言語的特徴とされる英語の付加疑問や日本語の終助詞は、それを使うと相手との心理的距離が縮まる機能がある、つまり、交話的機能がある。また、女性語の特徴の多くは、女性という性のアイデンティティーを示すという機能もある。このアイデンティティーを示す機能はこれまで、あまり言語学で問題にされてこなかったが、女性語のような問題には大きくかわる言語の機能である。このような側面からの言語の研究はこれから切り開かれねばならない分野であるが、それには、学際的統合的研究のスタンスが必須であろう。

7. 今後の課題

女性語研究のスタンスをめぐるここ十数年の足跡を辿って見たが、これからの女性語研究に残された課題は少なくない。

その中で、さしあたってなされなければならないのは、世界のできるだけ多くの文化における男女の地位、役割等の分析、記述とそれぞれにおける男女語の状況の記述であろう。どういう文化においては、どういうパターンの言語の男女差があるのかを記述し、それを総合的に考察することが、人間にとって、女性語というものが何であるかを明かにするための第一歩であろう。

また、女性語がどのような機能をもつものかを総合的に考察していくことが、女性語の全貌を明らかにするために必要であろう。これまでの言語研究は、命題を叙述するもの、あるいはコミュニケーションの道具としての言語を扱ってきた。しかし、女性語のような言語の問題は、主としてそれ以外の

機能と関わっている。女性語を切り口として、言語の指示的機能以外の諸機能、とくに話し手のアイデンティティーの表現としての機能の解明の方にも言語の研究を切り開いていかねばならないであろう。

参考文献

阿部圭子 1992 「言語と性差研究における理論の回顧と展望」

『ことばのモザイク』目白言語学会 306-321.

現代日本語研究会 1980 『ことば』 1号

Haas, Mary. 1944. Men's and Women's Speech in Koasati. Language, 20, 142-149.

井出祥子 1979 『女のことば、男のことば』 日本経済通信社

井出祥子、堀素子、川崎晶子、生田少子、芳賀日登美 1984 『主婦の一週間の談話資料 解説・本文篇』 および 『同 索引篇』文部省科学研究費補助金、特定研究「情報化社会における言語の標準化」総括班刊行物

井出祥子、堀素子、川崎晶子、生田少子、芳賀日登美 1985 『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書

寿岳章子 1979 『日本語と女』 岩波新書

Lakoff, Robin. 1973. Language and Woman's Place. Language in Society, 2, 45-80.

(日本女子大学)